

機軸乖離

森上 至晃

「十五分だけ、相手してやるよ」

出発ロビーで隣に立っていた男に何気なく話し掛けた時、そんな言葉が返ってきた。威圧感のある低い声は雑踏の中でもよく響く。初めての渡航に緊張していたとはいえ、相手を間違えたと少し後悔した。頻繁に海外に行く人間の中には胡乱な輩も多いと聞かすが、正直厄介な人間に捕まったと思った。

スパンコールが舞うように光が乱反射するターミナルを、多くの旅行者が小綺麗な恰好で闊歩している。僕はお洒落と言うものがよく分らないが、少なくともこの場に相応しくない服装ではないと思う。

しかし目の前の男は、到底これから海外へと発つ人間とは思えない出で立ちだった。服は色褪せ、髪は乱れ、顔の下半分から首筋にかけて髭で埋め尽くされている。バックパッカーの存在は知っている。懂れた事もある。だが彼は、そういった類の人種とも異なる雰囲気を感じていた。傷や不具合など構わず飛び立ってゆく年代物の単発プロペラ機の姿が頭を過ぎる。

「これから、どこへ行くんだ？」

真つ黒に日焼けした顔の中で、唯一白い瞳を輝かせてそう問う。イギリスへの短期留学だと言うと、男はアラスカから帰国したばかりだと答えた。グリズリーを肉眼で見たいが為に野宿をしていたらしい。怖くはなかったのか。そう尋ねた。しかし男は武勇伝を語るでもなく、ごく自然体で答えた。

「何を避けたからといって、生きている保証なんてないだろう。どれ程備えていようが、死ぬ時は死ぬ。ならば欲望に背を向けずに生きていたい。それだけだ」

これから出国という時に何を言い出すのか。呆気に取られる僕を余所(よそ)に、男は続ける。

「全ての感情を押し殺して七十歳八十歳まで生き延びて、一体何の価値がある？ 嫌われる事、疎んじられる事、周囲の目。そんなものばかりに縛られて、本当に生きていけると言えるのか？」

そう言つてのけた。そして準備体操でも始めるつもりなのか、全身を大きく仰け反らせる。筋張った肉体に青筋が浮き上がる。もしかしてこの男はグリズリーと邂逅したのではなく、その手で殴り殺して来たのではないか。全身から肉食獣の気配が充溢する。僕もこの場で狩られるのではという考えが脳裏を掠め、全身が強張る。それでもその場に留まったの何故か。

周囲を無数の人間が行き交う。快晴の空の下、発着を告げる館内放送が流れている。その真つ只中に、エアポケットが生まれている。小さな渦流が、時に機体を大きく揺さ振る。

「俺を攻撃的な人間とでも言いた気だな」

自分の感情を見抜かれた気がして身が竦んだ。本能が鋭敏な人間が有する感覚なのだろうか。だがその声は不気味な程穏やかだった。

「有識者を名乗る奴等の方がずっと残酷だ。奴等は誰かを助けたか？ 自分の思考に従わない人間を良識に欠けると糾弾するだけだ。良識は人を殺す。非難と黙殺とを使い分けながらな。いつそ誰も助けないと宣言してくれた方が、よほど清々しいだろうさ」

男の口調から僅かな怒り、或いは殺意すら覚える。白い瞳（め）が血走り、炯々と光を放つ。

「理論で武装して己に枷を嵌める、そんな生き方は御免だ。痛み、苦しみ、疲弊、その裏にある狂喜――俺を構築しているものは、そんなものだ。それで充分だろう。何かを遺そうなんて、そんなご大層な事をするつもりもない。ただ在るように在り、そして消える。それだけだ」

粗暴なようであり、存外繊細なのかも知れない。或いはそれが彼の本質なのか――。

男は頭陀袋と化した鞆から水筒を取り出し、得体の知れない黒い液体を躊躇なく飲み干してゆく。口元を拭った後、これから香港へと向かい、現地で次の行き先を決めると告げた。

「いつか、どこかで野垂れ死ぬかもな。だがそれも構わないと思っている。俺自身で選んだ道だからな。これから乗る飛行機が落ちたとしても、それが俺の寿命だったと受け入れるさ」

機首を持ち上げながら、旅客機が飛び立ってゆく――。

この男は常に独りなのだろう。百人中百人が彼を拒絶するはずだ。しかしその表情は澁刺としている。寂しくはないのか、そう訊いた。

「独りでなければ見えないものがあまりに多過ぎる。寂しさなんて感情は、既に過去のものだ。唯（ただ）一つ感じるものがあるならば、均質化した人や物が集積する空間にいと、ある叫びが湧き起こってくる。俺はここに居たくないってな」

そして再度身体を伸ばすと、微かに笑みを浮かべた。

「次は何を知覚するのか、ただそれが楽しみだ。果てというものに巡り合える瞬間（とき）を、俺はずっと待っている」

保安検査の時刻を告げる案内が流れ、荷物を持った者達が集まり始める。

「さて、そろそろ行くか。二度と会う事はないだろうが、名も無き男の痴れ言だと思ってくれ。じゃあな」

男は軽く右手を挙げると、振り返る事もなく立ち去った。少しの間、乾いた靴音が響いていたが、直後に団体旅客の一群に遮られた。彼らが通り過ぎた時、男の姿は既に無かった。

滑走路から双発機がまた一機、空へと突き抜けてゆく。男の足跡をなぞるように、僕は搭乗口へと歩み出していた――。